

〔目的〕 ヒトの生活は無数の生活行為から成り立っている。生活行為は労働よりも広く、非生産的なものまで含めてとらえられており行為者を列に、諸状況を行にとり、マトリックスとして、生活のための行為システムを「生活行為体系」と規定し、行動間の相互関連を中心に分析を加える。

今回は生活における自己裁量の幅が広い学生を対象に食事の摂取と日常生活行動・意識生活環境との関連をみた。

〔方法〕 本大学短期大学部の女子学生（18～19歳）710名について1989年1月下旬から2月下旬にかけて配票調査した。

〔結果〕 起床から登校までの在宅時間と学生の朝食の摂取状況との関連をみると、朝食を摂取する学生（朝食摂取群）は、朝食を摂取しない学生（朝食非摂取群）より在宅時間が長く両群の間に関連がみられた。（ $P = 0.0001$ ）

学生の一日の過ごし方について「規則的に過している」、「規則的に過していない」を自己評価させてみると朝食摂取群は74%が規則的に過ごしていると答えているのに対し朝食非摂取群は48%と少なく、両群の間に関連がみられた。（ $P = 0.0001$ ）

学生の居住別に朝食の摂取状況をみると、自宅通学生80%、寮生72%、その他58%が朝食を摂取していたが各群に関連はみられなかった。